

—五月晴れの空からひょうが降る—

(2000年5月24日の関東南部のひょう害)

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮澤 清 治

「ひょうの道」で降りやすい

空から降ってくる氷の粒で、直径 5mm 以上のものをひょう、5mm未満のものをあられという。ひょうは球形あるいは塊状で、透明なもの、乳白色のものなどさまざま。

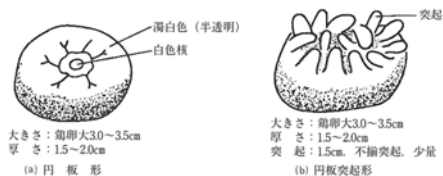
時に直径 50mm 以上の巨ひょうが降ったり、地上に数 cm から 20~30cm も積もったりする。

ひょうの降りやすい時期は、日本海側では 10 月から 1 月にかけての冬期、太平洋側では 5 月から 7 月にかけての初夏である。初夏は強い日差しで地面付近が熱せられる。このとき、大陸から冬の名残りの寒気が上空にあると大気の状態が極めて不安定になる。すると、積雲・積乱雲が発達し、激しい雷雨や突風を伴ってひょうが降りやすい。

全国のひょう害の月別発生件数をみると、2005 年までの 10 年間で最も多い月は 5 月の約 115 件、次いで 7 月の約 70 件である(気象庁資料)。5 月は農作物が生育し始める時期で、果樹が傷ついたり落果したりするので被害が大きくなる。2008 年産の青森県のりんごは、5 月、6 月、9 月と 3 度の降ひょうと 4 月の降霜により被害額は 103 億円

に達し、同県のりんご栽培史上最大の被害となった(NOSAI 誌、2009 年 7 月)。

ひょうの降る範囲は、幅が数 km の狭い帯状の区域で極めて局地的である。ひょうの降らない場所から徒歩数分のところに、壊滅的な被害を受けた畑もある。俗に「ひょうの道」という谷沿い、川沿いなどの所がひょうが降りやすい。



ひょうの形

(1975年6月9日新潟県紫雲寺町および中条町:新潟県農業気象災害速報 No.1 より)

ハトやキジが姿を消した

2000(平成 12)年 5 月 24 日、五月晴れの東日本上空約 5,000m に氷点下 18℃の寒気が流れ込み、地上気温が上昇して 25~30℃になった。このため、大気の状態が不安定となり、茨城県南部や千葉県西北部では突風・雷雨を伴ってミカン大からピンポン玉大の

ひょうが降った。

ひょうが学校や住宅を直撃してガラスが割れたり、児童らに当たったりして茨城県で32人、千葉県で130人が負傷した。茨城県取手市では、ひょうが雪のように積もり、乗用車が埋まり動けなくなったので住民が総出で、雪かきならぬひょうかきをした。

被害は建物のほか、スイカ、麦、果樹などの農作物やビニールハウスの倒壊などに広がり、被害額は合わせて茨城県で約12億円、千葉県で約66億円に上った。このほか、強風によるトラックの横転、電線の切断、鉄道などに乱れがでた。

一方、両県のひょうによる自動車や住宅などの被害に対して支払われた保険金は、700億円とひょう害として過去最大。ちなみに2000年9月10～12日の東海豪雨に対して支払われた保険金は1,030億円である(日本損害保険協会、ファクトブック2009)。

今回のひょう害を、気象庁OBの星野保氏(千葉県我孫子市在住)は自著の中で次のように活写した。

「5月24日正午過ぎ、一天にわかにかき曇り、間もなく雷鳴がとどろき、激しい雨となった。と見るまに白い雨に混じりひょうが降ってきた。ひょうは大きいので直径3.5cm、形は真ん丸でなく、むしろ円盤形に近い。

ひょうは横なぐりの強風にあおられ、家の窓ガラスを割り、部屋の中に飛び込んだ。ひょうとガラスの破片とが混じり惨状には手をつけられない。雨どいも穴だらけになってしまった。



発達した積雲

畑はどこも壊滅。例年なら花盛りになるバレイショ畑もまったく葉も茎もない空畑となった。今朝まで青々していた夏ネギの姿も見られなく、玉ネギ畑は下の玉だけで、それもひょうにより傷つけられ穴があいた。緑の消えた畑は、むなしい姿である。

水稲も被害を受けた。今ごろは緑一面のはずだが、どこの田も3分の1くらいは白い水面だけとなった。梨畑も全滅だ。

この降ひょうで、ハトやキジの死がいを見た人がいたという。そういえば、あれほどたくさん見かけたハトの姿が、その後半月くらいはほとんど見かけなくなった。

今回の降ひょうは、利根川に沿って我孫子市から佐倉市に至る極めて狭い地域の局地的な異常気象であった。」

近年は降ひょうがもたらす脅威が増大している。過去のひょう害を学ぶことが次の被害を小さくする。